

2025年11月28日

## 第21回中曾根康弘賞 受賞記念スピーチ

優秀賞 認定NPO法人PLAS代表理事 門田瑠衣子

この度は、このような栄誉ある賞をいただきまして、心より感謝申し上げます。ご紹介にあずかりました認定NPO法人PLASの代表をしております、門田と申します。

今回、このような素晴らしい賞をいただいておりますが、これは決して私だけにいたしたものではありません。これまで20年間活動してまいりましたが、本当にたくさんの方々に支えていただきました。寄付をしてくださった方や、ボランティアの方、そしてスタッフ、また、現場には20名近いスタッフが今日も活動を続けております。そうした、これまで私たちを支え、一緒に活動してくれた仲間たちみんなにいただいた賞だと思っております。また、私たちの活動を通じて未来を切り拓いてきた子どもたち、そして子どもたちを支えるアフリカの保護者の方々、皆さんに対してもいただいた賞ではないかと考えております。

私たちが活動を始めた頃を思い返しますと、当時私は24歳で、大学院生でした。何か世界の子どもたちのためにできることをやってみたいなと思い、いくつかの国でボランティア活動をしていました。その時にたまたま訪れたのがケニアの孤児院でした。

たくさんの子どもたちが孤児院で暮らしていて、当時、多くの子どもたちがエイズで親を亡くし、親戚に引き取られず、孤児院にたどり着いていました。話を聞くと、「エイズで差別をされ、誰も引き取ってくれなかった」と、そのような苦労を重ねていたのです。「何とかしたい」と強く思いました。

当時24歳だった私は日本に戻り、どうにかできないかと悶々と考える日々が続きました。そんな中、世界各国で私と同じように様々なボランティア活動をしていた仲間と出会い、「私たちで何か始めてみよう」ということで立ち上がったのが、このPLASという団体です。

その仲間の中に、当時アフリカのウガンダで活動しているメンバーがいて、同じくエイズで孤児になった子どもたちが通う小学校が助けを求めていました。その学校は、スラムの中にあって、もはや勉強もできないほど建物がボロボロで危険な状態になっ

ていると。そこで、「まずはその学校から支援を始めてみよう」と活動をスタートしました。

当時、20人ほどの学生の仲間たちを募ってウガンダと一緒に渡りました。そして学校の建設作業から始めたのですが、私は、スラムの人たちは学校の建設を歓迎してくれるだろうと思っていました。ところが実際には、スラムの住人の方々には、「このスラムには学校はいらない」「エイズの子どもはどうせ死ぬから勉強は必要ない」といった反対の声も非常に多くありました。

活動を進める中で、「学校を建てるなら、打ち壊しに行くぞ」と脅しを受けることもありました。本当に、文字通り命がけで活動を始めたのが最初の経験です。学校建設のために現地の大工さんを雇ったのですが、日本人に初めて会うということで、「高額な給料をもらえるだろう」と期待され、法外な額を請求されることもありました。

それでもなんとか建設を進めている中で、私たちは8歳の男の子——**デリック君**——というウガンダ人の男の子に出会いました。彼に話を聞いてみると、父母はエイズで亡くなつており親戚に引き取られているけれど、その家の実の子どもは学校に行っているのに、デリック君だけは行かせてもらえていない、食事も家族と一緒にではなく、残り物をひとりで食べている、学校に行かない間はずっと家事手伝いばかりで友達もいない、そんな状況でした。

彼は言いました。「学校に行きたい。友達がほしい」何とかしたいと思いました。なんとかしたいなと思ったのですが、まだ活動を始めたばかりの私たちはどうすればいいかわからぬ状況もありました。スラムの中で学校を建てるときに脅しを受けたことも重なり、眠れない夜が続いたことを思い出します。

そんなある日、建設現場で子どもたちの姿を見つけました。どうしたのかと聞くと、「学校を作ってくれているなら、自分たちも手伝いたい」と言って、小さな水のタンクを持って、水を運んでくれていました。その姿を見たとき、この子たちのために何としても学校を建てなければならない、と決意を新たにしました。

そこから私は、スラムの人たちと対話を始めました。大工さんたちとも、とにかく話しをしました。すると、スラムの人たちの中にも、少しずつ手伝ってくれる住民が増えていきました。最初は法外な給料を要求していた大工さんたちが、最後には「今日からは僕たちもボランティアになる。もう給料はいらない」と言ってくれて、最後の1週間は全員がボランテ

ィアとなり、学校が完成しました。

デリック君も、その学校に通えるようになりました。初めての鉛筆、初めてのノート、初めての授業。彼はみるみる笑顔を取り戻していき、こうやって子どもたちの未来が変わっていくのだ、と感じました。この経験から私が学んだことは、**子どもたちの未来を変えるには、大人が変わらなければならない**ということでした。教育を否定していた大人たちが、やはり子どもに教育が必要だと、意識を変えて、子どものために動き始めてくれた。こうした大人の変化こそが、子どもたちの未来をつくっていくのだと強く感じました。

今でも PLAS の活動は、私たち自身が変化していくこと、そして「地域の人と共に」「変化を共につくる」ことを大切にしながら続けています。そして 10 年ほど経ったある日、デリック君からメッセージが届きました。「PLAS のみなさん、僕のことを大きな愛情で助けてくれてありがとう。今は結婚して子どももいて、働いています。皆さんは僕の大切な友達です。」そのメッセージを見たとき、「未来が変わったのだ」と心から感動したことを覚えています。

現在、PLAS の活動はケニアとウガンダで広がっています。活動を始めた当初はエイズ孤児を支援していましたが、2020 年代からはさらに活動対象を広げ、貧困家庭やさまざまな事情を抱える子どもたちへの支援も展開しています。

現在の PLAS のビジョンは、**すべての子どもが、前向きに生きられる社会をつくること**です。子どもたちが、自分の未来を選び、自分を信じ、前を向く力を大人から子どもへと手渡していく。そんな循環をアフリカからつくっていきたいと考えています。

現在、PLAS の主軸とする事業は 3 つあります。1 つは親子支援の事業、2 つ目は性に関する教育の事業、そして 3 つ目に現地の団体の組織基盤強化の事業です。

まず、親子支援の事業ですけれども、アフリカで私たちが支援しているご家族というのは、本当に年収が 2 万円にも満たない、1 日 1.25 ドル以下で暮らしている家庭が貧困層というふうに言われますが、そこにも満たないような貧困状態にあるご家庭を支援しています。もちろん、水道もなく、ガスもなく、電気も通っていない。藁葺き屋根の家で暮らされていて、話を聞いてみると、「昨日は 1 食しか食べなかった」というようなご家庭もあるぐらいです。子どもたちも小学 1 年生にはなんとか入学していくのですけれども、卒業までたどり着く

子がほとんどいないような状態のご家庭をサポートしています。

どのように支援しているかというと、保護者にはお金を稼ぐ力をつけていただいて、スマートビジネスを始めていただいている。例えば農業や、養鶏などを通じて、少しずつ自分の力で貧困から抜け出してお金を稼げるようになり、そのお金を子どもたちの教育費や医療費、食事など必要なところに使っていくということを推進しています。

そのスマートビジネスを始めるための研修や、初期投資などの支援を行っていますが、それと同時に、保護者と子どもにカウンセリングや相談を提供しています。子どもたちは「自分は何者にもなれない」「自分はもちろん小学校卒業することはできないだろうし、中学校に行くなんてきっともってのほかだろう」と思っている子どもたちばかりです。そうした子ども達に、得意な教科を聞き出したり、どんな大人になりたいか、どんな将来の夢を持っているかということを、カウンセリングを通じて話をしていきます。それと同時に保護者は稼げるようになっていくわけです。そのお金を中学校の進学資金に当ててもらうということをやっています。

また性に関する事業では、実は私たちが活動しているケニアのホマベイ郡という地域では、10代の女の子の妊娠率が30パーセントを超えており、それによって女の子たちは様々な身体のリスクもありますし、学校を中退してしまったり、そのまま貧困状態に陥ってしまったり、ということが課題になっています。正しい知識をなかなか持てる機会がないのですね。性教育が圧倒的に足りていないということで、性に関する教育を行っているのですけれども、私たちの活動の特徴としては、大人がそれを子どもに教えるのではなく、子どもの中に“教えられる小さな先生”をつくっているところです。

自分の地域を変えたいという意欲ある10代の若者たちに手を挙げてもらって、彼らに性教育の勉強をしてもらい、彼らが中学校や高校を回りながら、正しい性に関する知識を伝えています。

そして3つ目の組織基盤の強化ですけれども、これはすべての私たちの活動は現地の人たちと行っているのですね。現地の人たちが立ち上げたNGOと一緒に活動を行っています。そのNGOの方たちが、例えばコミュニケーションのスキルを得たり、会計のスキルを得たり、さまざまなスキルを私たちの研修から得ることで、組織そのものを強くして活動を続けていけるようにする。そういう活動を行っています。

これらの活動は、ほとんどが皆さんの寄付によって支えていただいている。受賞理由の中にも「クラウドファンディングなどさまざまな挑戦をされている」というふうにおっしゃっていました。クラウドファンディングや、それからチャリティーオークションなどで、著名の方に協力していただくなどしてご寄付を集めながら、それをアフリカの子どもたちに届けています。

これまでの 20 年間の活動で、どういった成果が得られたのか。これまでケニアとウガンダで 8,500 人以上の子どもたちに支援を届けてきました。ケニアのある地域では、私たちの支援を受けた子どもたち全員が中学校に進学しました。これは現地では本当に驚異的な数字で、現地で中学校に通っているのは大体全体の 4 割ぐらいなのです。私たちの支援を受けた子どもたちは全員が進学したわけですけれども、私たちが学費を出しているわけじゃないですね。先ほどお話したように、保護者の方たちが貧困から抜け出し、自分の力で稼げるようになって、子どもたちに教育が必要だと理解しながら、教育に投資をしています。

さらに子どもたちは「自分も学校に行けるのだ」ということで、勉強の意欲もとても高まっています。私たちが支援する前は、ほとんど奨学金を受給できる子がいなかつたのですけれども、支援を受けた後は、支援前に比べ 12 倍の子どもが奨学金を受け取れるようになっています。この奨学金は私たちが出しているわけではなく、ケニアの中にある奨学金ですね。保護者の方の収入と、そうした奨学金で、子どもたちを学校に行かせることができるようになっています。

私たちは子どもの内面にも注目をして、データを測定したりしているのですけれども、支援前は「自分のことが好きじゃない」と言っていた子がほとんどだったのですけれども、2 年ほど支援を終えた後は、子どもたちの約 9 割が「自分を好きになれた」というふうに答えてくれています。本当に草の支援ですけれども、皆さんにこうした地道な活動を評価いただけたこと、本当にありがたいなと思っています。

本当に、今回このような賞をいただきまして、ありがとうございます。次につながっていくように、さらに多くの子どもたちに皆さん思いを支援の形として届けてまいりますので、これからもどうぞ応援のほどよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。